【社会科】教科提案

全体学習につながる「ひとり学習」の充実をめざして
～ひとりひとりのまなざしを大切に～

1．研究テーマ設定の理由

（1）学校提案とかかわって

本年度の学校提案の**「互いのまなざしが響き合う学習～一人ひとりへの確かなみとりと支援によって～」**を社会科の学習で考えてみることにする。

子どもは何かの事象にぶつかったとき，一人ひとりの事象に対する受け止め方・見方・考え方は異なってくる。そのちがいが最も現れやすい分野のひとつが社会科の学習であると考えている。社会科の学習内容は，主として現代社会の事象を取り上げるため，より具体的・直接的に現実社会とかかわり合う教科であるといえる。また社会の仕組みは，単に知識として獲得するようなものではなく「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせる中で認識され，それを追究していく過程を通して深化していくものと考える。子どもたちが学びを進めていくとき，自分の学習を深化させ多くの成果を手にするためには，まず自分の意思で主体的に学んでいこうとすることが大切である。学習を，教師側から押し付けたり引っ張ったりするのではなく，一人ひとりの子どもに寄り添いながら，学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく指導姿勢が重要である。

例えば，「クラスの子どもたちは，今どんなことに興味・関心をもち，何を追究しようとしているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえ，どのように対象に向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。子どもたちはその追究の過程を通じて，新たな知識・理解を獲得し，深め，よりよく問題を解決する方法や能力を身につけていくのである。この場合，教師は，その学習意欲を刺激し方向づけ，その学習活動を支援する存在でなければならない。また子どもたちが自ら追究する中で獲得していった知識は，単に知識の増加に留まらず，その知識を獲得するための道筋や学び方をも体得するはずである。社会科の教科指導を通して，個々の学びを深めさせながら，学習経過や学習成果を交換・交流させることで，子どもたちのまなざしを共有させ響き合わせていきたいと考えている。

（1）めざす子ども像

社会科の究極的な目標は，社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかかわり，社会生活の中で自分はどう生きていくかを考え，社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。

これは子どもたち一人ひとりに，自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって，社会科学習においては，「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするために，社会的事象に子どもたちを主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで，「社会科教育を通して実現すべき子ども像」として，次のように考えた。

Ａ：事実を的確にとらえ，こだわりをもちながら学習をすすめていける子
Ｂ：社会事象への公正な判断力をもち，未来への生き方につなげられる子

Ａの「事実を的確にとらえ」とは，事実に基づいて見たり考えたりすることである。これは社会科学習の原点（or 社会科学の基本的態度）であり，社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり，そ

れは，既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは，社会的事象に対して疑問を抱くことも含め，自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会的事象と出会ったときに，他者の考えと自分の考えを比較したり，共感したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で，子ども一人ひとりが友達とかかわりながら，自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより，社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると考える。

Ｂの，「社会事象への公正な判断力をもち」は，社会的事象を一面的に調べ理解するにとどまらず，多角的・多面的にとらえることで，事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは，立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものであり，多角的・多面的にとらえることで，より広い視野から考察・判断でき，子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また，自分の見方や考え方を表現し合い友達と比較・交流することによって，より公正かつ総合的なものの見方ができるようになるに違いない。

また，「未来への生き方につなげられる子」とは，自分が生活している社会に深い関心や愛着をもち，それをもとに自分なりの未来の社会像や生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで，自分の考えや夢をより広げ，自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして，“自分にとっては”“自分ならば”など，自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し，未来への生き方につなげていくことができる子に育って欲しいと願っている。

２．社会科学習における「互いのまなざしが響き合う学習」

①ひとり学習の充実からまなざしの響き合いへ

社会科学習の具体的なねらいは，子ども一人ひとりが自ら問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ，自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力，学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。その際，一人ひとりの子どもにとって学習を一層意義深いものにしていくために，全体学習と同様に「ひとり学習」を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり，ひとり学習を発展させる場でもある。そこにおいて，全体学習はひとり学習のために，ひとり学習は全体学習のために相互に関連し合いながら位置づけられるのである。

学習課題（問題）を設定するのは子ども達であるが，ひとり学習を充実させるために教師がどのような学習対象を選ぶのか，ということが次に重要な問題となってくる。

ア．学習対象の選び方

まず，ひとり学習をすすめていく学習対象が，それぞれの子にとって適切かどうかを考えなければならない。一人ひとりの子どもが学習対象と出合ったとき，ひとりで学んでいける学習対象であるかどうか，をよく吟味しなければならない。子ども達が，多角的・多面的に疑問をもち，主体的かつ発展的に追究し続けることができるもの，が学習対象としてふさわしいと考える。

イ．学習対象との出合わせ方

初めて学習対象に出合うとき，子ども達がその学習対象についてどのような思いやイメージをもっているのかという点を重視したい。「その学習対象について，ぼくは○○だと思う。」「わたしは，○○についてこんな疑問をもっているよ。」というように，様々な思いをもたせたい。自分な

りの思いも何もなしに，学習対象と出合うことがないよう指導しなければならない。学習対象に対して，一人ひとりの思いをしっかりもつことから，ひとり学習がスタートするのである。

ウ. 学習対象との関わり方

学習対象と出合ったとき，子ども達は様々な疑問をもち，追究をはじめ自分で課題をみつけていく。追究活動が進むほど，子ども達はもっと探究したくなってひとり学習がより深められ，それが学習に対する確信にもつながるのである。このとき指導者は，誰がどんな事を調べ，どのように資料作りをしているのかを，確実に把握しておくことが大切である。子ども達の考えや学習過程を知ることは，子どもと指導者との「まなざしの共有」につながる。また，自分の疑問を解決できない子に対し，調べ方や方法をタイミングよくアドバイスすることも当然効果的である。

学級での全体学習で話し合いが始まると，いろいろな考えがでてくる。友達の考えをしっかりと聴き，自らの思いを出し合う中で，「なるほど，そんな見方や考え方があるんだな」と友達の考えに共感することや，「ぼくと○○さんとは考えがちがうようだから，◇◇を用意して，もう一度ぼくの意見を言い直してみよう。」というように，自分の考えを見つめなおすきっかけになり，新たなひとり学習の課題が設定されるのである。このように，子ども達どうしが“相互の刺激”をし合い，響き合いながら学習をすすめていくように留意することが，指導上大変重要なのである。

３．研究の展望

私たちは今，“全体学習”につなげるために“ひとり学習”の充実に重点をおいてみた。その上でまず，ひとり学習を充実させるための重要なポイントとして，**“学習対象と子どもたちとのかかわり”，“楽しく学習できる単元計画”，“ひとり学習の質の変容”**，を掲げてみる。これら３点について，「寿司博覧会！～寿司から世界が見える～」の実践を通して検証を試みたい。

①.「学習対象と子どもたちとの関わり」について

寿司博覧会の学習では，学習対象は「寿司」であった。３年生レベルの地域学習としての寿司屋さんではなく，５年生として，日本と世界との関係や流通・輸出入・運輸といった学習ができると思ったからである。このように学習対象の中に多様で発展的な要素が入っているものでないと，子どもたちが対象と何度も対話を重ねながら，ひとり学習を自発的に進めていくことができないと考えたのである。

②．「楽しく学習できる単元計画」

“寿司”で学習計画を子どもたちと一緒に考えていった。“寿司を作りたい”“寿司屋に行って寿司を食べたい”といった，子どもたちの自由で楽しい思いに，プラスαとして世界の国々との貿易・運輸などの学習内容を，うまくかみ合わせた単元計画を設定した。子どもたちが学習していて楽しいな！と思える活動と，もっともっと追究したくなるような学習対象や学習課題との絡ませ方，自分の追究している課題が他者の課題ともつながっていたんだ！というような，子どもどうしの学びの交流を考慮した単元計画を設定することが大切であると考えた。

③.「ひとり学習の質の変容」

学習対象と始めて出会った子どもたちは「寿司の値段調べをしたい」「寿司ネタの種類を調べたい」「日本各地の名産品の寿司を探してみたい」など，それぞれが自分の思いをもって学習対象と関わっていく。しかし，ひとり学習が進んでくると，初めは寿司の値段を調べていた子が“値段の違いはネタの違い”→“同じアオリイカでも値段が違うのはなぜ？”→“日本で

とれたアオリイカと輸入されたアオリイカ”→“なんと外国産の方が安い！”→“輸入ルートを調べよう”→“中国から船で運ばれてくる”→“日本に輸入されるときに関税というものがかかるらしい”…という風に，ひとり学習の問題意識がどんどん拡がり，深く鋭くなっていくのである。これが，学習対象と何度も対話しながら進むひとり学習の醍醐味であると考える。

（1）見とりと支援の手だてと方法

クラスみんなが響き合う学習が成立するのは理想だが，そううまくいかないことも多くある。そんな時，自分たちはどんな風に子どもたちを見とり，支援していけばいいのだろうか？そこで具体的な手だてとして，**“着目児”**と**“座席表”**この二つを柱として子どもたちの見とりと支援を行いたいと考えている。

・ 着目児の設定

クラスには自分から進んで学習できる子もいれば，学習対象とどのように関わっていいのかわからないで立ちすくむ子など，様々な子どもたちがおり，どの子にもそれぞれの学びがある。私たちは学習を進めていく時，何度か立ち止まって子どもたちの学習過程を検証することを忘れてはいけない。そこで，

A,学習対象に積極的に関わっていける子

C,学習対象との関わりが薄い子

B,AとCの中間の子

この三つのグループに分け，A，B，Cの各グループから1，2名の子どもを抽出する。そして，その子たちの考えの移り変わりをノートや発言を記録しながら追っていくことにより，個々の変容が見えてくるのである。従って，学習の開始時から着目児の学習を追い続けることがベストである。全体学習の場で同じ発問をしても，A，B，Cそれぞれの子どもたちの受け取り方が違うことがわかる。そのことでひとり学習の質が変化してくるのである。その子が今どんな考えを持ち，次は何に向かって学習を進めていこうとしているのか，という内面の変化を私たちは把握しておかなければならない。それによって支援の仕方も変わってきて当然である。このようにA，B，Cグループの着目児をしっかり見とり，支援していくことによってクラス全体の学びの方向が，より鮮明に見えてくると考えている。

・ 座席表の活用

座席表は，一人ひとりが今何を考えているのか，どんなことがわからないのか等々の個人データでもある。また座席表の使い方は，こちらの意図する授業展開で活用方法も変わってくる。

例えば「今日は子どもたちどうしに互いを意識させた学習を展開したい」と考えるのであれば，前もって座席表を配り，互いの考えをしっかりと読ませておくことが大事である。しかし「授業の中で友達の考えに意外性を持たせ，自分をふり返らせたい」と考えるなら，座席表は子どもたちに見せずに，教師の頭の中にいれておけばいいのである。

このように座席表指導案を使うことで，「この子の考えとこの子の考えはここでつながる」「この考えは相反する考えだからここで対立するだろう。その時きっとこの子が関わってくるだろう」というように，授業の流れがひとつでなく，何本かに枝分かれする展開もあるという見方ができればいいと考える。それが，ひとりひとりに対しての確かなみとりと支援につながっていくと考え今後も実践を重ねていきたいと考えている。